

筑波大学附属小学校 著

「美意識」  
を育てる

共に幸せに生きるための  
授業とカリキュラム

---

Elementary School attached to University of Tsukuba



東洋館  
出版社



## まえがき

---

1994年、アメリカのロサンゼルスで大地震（ノースリッジ地震）が発生し、大きな被害をもたらした。そのとき、現地に支社があったある日本企業が復興支援のボランティア活動に参加したのだが、現地に住む日本人たちからこの活動に多くの批判が寄せられたという。会社名が入っていたTシャツを着て活動をしていたため、売名行為として受け取られてしまったのである。しかたなく、ボランティアに参加した社員たちはTシャツを脱いで活動した。中には、活動自体を断念してしまった人もいた。すると、一連の様子を見ていた現地のアメリカ人から、「どうして会社名の入ったTシャツを着てボランティア活動をしてはいけないのか」と、批判した日本人に対する疑問の声があがった。

日本文化に根づいている精神主義の立場から考えれば、会社名の入ったTシャツを着てのボランティア活動は、偽善的な行為として映る。一方、合理主義の立場から考えれば、会社名の入ったTシャツを着ていようが着ていまいがボランティア活動自体は善行そのものであり、批判されることには当たらない。

このエピソードは、善行に対する評価も、国、組織、時代、文化等の違いによって変化するものであり、絶対的な価値基準はないことを示している。考えてみれば、私たちが実社会の中で直面する問題も、明確な正解がない場合が少なくない。国際問題、経済・政治問題、そして環境問題等の構造は複雑の一途をたどり、「ああすればこうなる」式の打開策では歯が立たない状況下にある。クローン技術、原子力発電、死刑制度、安楽死等の是非、そして昨今の新型コロナウイルス感染対策にしても、明確な正解はない。

『教育研究』（2020年7月号特集「教育に必要な『美意識』とは」）において、哲学者である苫野一徳氏（熊本大学准教授）は、特集論文の中で「美についての意識」を次のように記している。

「『美』は、そのような単なる相対主義を超えて、深い共通理解と相互承認の領域へとわたしたちを導いてくれるのだ。ここには大きな教育的意味がある」

たとえ正解を導くことができなくても、互いに普遍性（共通理解可能性）を見いだそうとする態度や精神を教育によって育むことができれば、それはこれからの社会で生き抜くための「生きる力」となるにちがいない。ここに、本研究「『美意識』を育てる」ことの本質的な価値があるように思う。

OECD（経済協力開発機構）が組織したプロジェクトであるDeSeCoが示したキーコンピテンシーの一つに「異質な集団で交流する力」がある。今後さらにグローバル化が進めば、さまざまな文化的背景、価値観、経歴をもった異質な集団といかに交流できるか、自分の価値基準だけにとらわれない“柔軟な心のもちかた”が求められるに違いない。

筑波大学附属小学校長 佐々木昭弘

まえがき	1
------	---

## 第1章 「美意識」を育てる ～研究の全体像～

### 美意識を育てる

[研究企画部] 高倉弘光/桂 聖/由井蘭 健/大野 桂/辻 健  
/平野次郎/笠 雷太/眞榮里耕太/加藤宣行/盛山隆雄

1. 研究テーマ『「美意識」を育てる』は、こうして生まれた……………6
2. 『「美意識」を育てる』研究の概略……………10
3. 『「美意識」を育てる』研究で明らかになったこと……………14

## 第2章 「美意識」を育てる ～各教科等の研究～

### 国語科 「美意識」を育てる授業とカリキュラム

#### —読むこと（文学的文章）の授業改善を中心に—

[国語科教育研究部] 青木伸生/青山由紀/桂 聖/白坂洋一/弥延浩史

1. 国語科で育てたい「美意識」とは……………28
2. 国語科で「美意識」を育てる授業の条件……………29
3. 国語科で「美意識」を育てる授業の実際……………30
4. 国語科で「美意識」を育てるカリキュラム……………39

### 社会科 「よりよい社会」を形成するために問い続ける

[社会科教育研究部] 由井蘭 健/粕谷昌良/山下真一/梅澤真一

1. 社会科で育てたい「美意識」とは……………42
2. 社会科で「美意識」を育てる授業の条件……………43
3. 社会科で「美意識」を育てる授業の実際……………44
4. 社会科で「美意識」を育てるカリキュラム……………52

### 算数科 子どもの「美意識」を育てる算数授業

[算数科教育研究部] 夏坂哲志/盛山隆雄/中田寿幸/大野 桂/森本隆史/青山尚司/田中英海

1. 算数科の目標と『「美意識」を育てる』研究の関わり……………56
2. 「美意識」を育む授業を具現化するための視点と授業イメージ……………57
3. 「美意識」を育む授業の実際—5年「三角形の内角の和」—……………58
4. 子どもの「美意識」を育む授業づくりの条件……………63
5. 子どもの「みえ方」基点でつくる、「美意識」を育む図形カリキュラム……………65

**理科****理科授業を通して「美意識」を育てる**

[理科教育研究部] 佐々木昭弘／鷲見辰美／志田正訓／富田瑞枝／辻 健

1. 理科で育てたい「美意識」とは……………70
2. 理科で「美意識」を育てる授業の条件……………72
3. 理科で「美意識」を育てる授業の実際……………73
4. 理科で「美意識」を育てるカリキュラム……………83

**音楽科****音や音楽を子どもに委ねることで子どもの「美意識」は育つ**

[音楽科教育研究部] 高倉弘光／笠原壮史／平野次郎

1. 音楽科で育てたい「美意識」とは……………84
2. 音楽科で「美意識」を育てる授業の条件……………86
3. 音楽科で「美意識」を育てる授業の実際……………88
4. 音楽科で「美意識」を育てるカリキュラム……………95

**図画工作科****その先にある「美」に意識を向けようとする子どもを育てる**

[図画工作科教育研究部] 北川智久／仲嶺盛之／笠 雷太

1. 図画工作科で育てたい「美意識」とは……………98
2. 図画工作科で「美意識」を育てる授業の条件……………98
3. 図画工作科で「美意識」を育てる授業の実際……………100
4. 図画工作科で「美意識」を育てるカリキュラム……………112

**家庭科****家庭科の「美意識」は、生活の中で生きて働く**

[家庭科教育研究部] 横山みどり

1. 家庭科で育てたい「美意識」とは……………114
2. 家庭科で「美意識」を育てる授業の条件……………115
3. 家庭科で「美意識」を育てる授業の実際……………116
4. 家庭科で「美意識」を育てるカリキュラム……………124

**体育科****「美意識」を育てる ～新しいカリキュラムの創造～**

[体育科教育研究部] 眞榮里耕太／平川 譲／齋藤直人／山崎和人

1. 体育科で育みたい「美意識」とは……………126
2. 体育科で「美意識」を育てる授業の条件……………127
3. 体育科で「美意識」を育てる授業の実際……………129
4. 体育科で「美意識」を育てるカリキュラム……………135

## **外国語科** 外国語科で育てる「美意識」～音とコミュニケーションの視点で～

外国語活動・外国語科教育研究部 荒井和枝

1. 外国語活動・外国語科で育てたい「美意識」とは…………… 138
2. 外国語活動・外国語科で「美意識」を育てる授業の条件…………… 139
3. 外国語活動・外国語科で育てる授業の実際…………… 141
4. 外国語活動・外国語科で「美意識」を育てるカリキュラム…………… 145

## **道徳科** 授業を変える、カリキュラムが変わる

道徳科教育研究部 加藤宣行／山田 誠

1. 道徳科で育てたい「美意識」をどのように捉えたか…………… 146
2. 道徳科で「美意識」を育てる授業の条件…………… 149
3. 道徳科で「美意識」を育てる授業の実際…………… 152
4. 道徳科で「美意識」を育てるカリキュラム…………… 159

## **STEM<sup>+</sup>総合活動**で育てる美意識

総合活動教育研究部

1. STEM<sup>+</sup>総合活動とは何か…………… 162
2. STEM<sup>+</sup>総合活動と「美意識」との関係…………… 163
3. 総合活動で育てたい「美意識」…………… 163
4. STEM<sup>+</sup>的見方・考え方…………… 165
5. S、T、E、M、A、Lの役割…………… 166
6. 「美意識」を育てる総合活動の授業の実際…………… 167
7. 「STEM<sup>+</sup>総合活動」のカリキュラム…………… 171

## **教科等横断的な学習（理科・保健教育・道徳科）**

### 正解のない問題に納得解を出す「いのちの授業」

佐々木昭弘／齋藤久美／加藤宣行／山田 誠

1. 「いのちの授業」で育てたい「美意識」とは…………… 174
2. 「いのちの授業」で「美意識」を育てる条件…………… 174
3. 「いのちの授業」で「美意識」を育てる授業の実際…………… 175
4. 「いのちの授業」で「美意識」を育てるカリキュラム…………… 182

あとがき…………… 184

第 1 章

「美意識」を育てる

～研究の全体像～



# 「美意識」を育てる

研究企画部 高倉弘光／桂 聖／由井 蘭 健／大野 桂／辻 健  
／平野次郎／笠 雷太／眞榮里耕太／加藤宣行／盛山隆雄

## 1. 研究テーマ「『美意識』を育てる」は、こうして生まれた

筑波大学附属小学校は、明治6年（1873年）に師範学校の附属小学校として開校し、令和4年（2022年）に創立150周年を迎えました。創立以来、本校は日本の初等教育がどうあればよいか、理論的・実践的な研究を重ねて参りました。それらの研究は、いつの時代も日本の教育の「いまと未来」を見据える内容であったと言えます。

そのすべてを振り返ることはできませんが、昭和の終盤からの本校研究テーマを下にご紹介します。

- 昭和62～平成2年 「自ら学び育つ授業の創造」
- 平成3～5年 「子どもの感性が生きる授業の創造」
- 平成6～9年 「学ぶ価値を見出し追究する活動」
- 平成10～12年 「自分づくりを支える教育課程」
- 平成13～16年 「子どもの豊かさに培う共生・共創の学び」
- 平成17～20年 「『子ども力』を高める」
- 平成21～24年 「『独創』の教育」
- 平成25～27年 「日本の初等教育、本当の問題点は何か？」
- 平成28～令和元年 「『きめる』学び」
- 令和2～5年 「『美意識』を育てる」

ご覧のとおり、本校の研究では一つのテーマについて、3～4年をかけて追究します。そして研究の成果や課題に鑑み、また時代の変化に即応して次のテーマを考えるのです。

さて、最新の研究テーマ「『美意識』を育てる」は、どのように生まれたのでしょうか。まず、その経緯からお伝えします。

### （1）時代の動向から考える

新しい時代「令和」に入って2年目（2020年）、国の教育の道標となる新学習指導要領が、装いを新たに小学校で全面実施となりました。時おりしも〈新型コロナウイ



ルス感染症拡大)が始まった年でもあります。

新しい学習指導要領では、各教科等の目標や内容を、これまでの内容ベースから資質・能力ベースへと転換しました。それは学習指導要領が始まって以来の大きな変化であり、国の並々ならぬ意気込みが感じられるものでした。資質・能力ベースへの転換、その大きな理由は「時代の変化」にあったのではないのでしょうか。

本校の新しい研究の方向性を探るときにも、急速なスピードで変化する時代の動向を捉え、方向性を見据えることは大切な位置づけとなりました。

## (1)-1 人生107年時代

---

平成29年に厚生労働省から出された「人生100年時代構想会議」の中間報告の中では、2007年に生まれた日本人の半数が107歳まで生きると推計しています。

たとえ、定年が75歳まで延びたとしても、その後30年以上老後の時間があることとなります。いや、「老後」という言葉も使われなくなる時代が来るのかもしれませんが。生涯、人生の現役として生き続けることが望ましく、あるいは生涯現役で働き続けることが一般的な生き方となることも考えられます。

新しい学習指導要領では、「知識・技能」の習得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう力・人間性等」の涵養という3つの資質・能力をベースに各教科等の目標や内容が書き換えられました。

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」という文言は、以前から使われてきたものです。しかし、今次改訂で使われているそれらの文言は、100年以上にも及ぶかもしれない長い人生を、幸せを感じながら生き抜くための「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」という意味合いが強いと考えれば、それらは新たな価値が付加されているものと捉えられるべきでしょう。

これらを踏まえ、新しい本校研究の方向性を探るとき、子どもたちが「人生107年時代」を幸せに生き抜くための教育、授業をどう改革していくか、という視座に立ちたいと考えました。

## (1)-2 AI(人工知能)時代

---

イギリスで起こった第一次産業革命。大量生産のための機械化によって、多くの失業者を出し、それを解消するのに30年かかったとされます。

いま盛んに言われる言葉に「AI時代」がありますが、このAI革命もまた産業革命の一つです。しかもこの産業革命は、地球上で起こる最後の産業革命だとする研究者もあり、AIが人々の仕事を奪うと予想する研究者も多いのは周知のとおりです。

さて、AIの開発研究において、日本は世界のリーダーになっていると思いきや、2019年のデータ(2019年度版政府による科学技術白書)では、2004年に世界第4位だったAI開発にかかわる論文の被引用数が、2019年には世界第9位に、2021年は世界第10位と急転落しています。これに危機感を抱いているのは研究に身を置いている人ばかりではなく、国そのものと考えられます。

今次学習指導要領改訂での「プログラミング学習」導入、コロナ禍で急展開した「GIGAスクール構想」も、上のことに鑑みれば必然的な流れとも言えます。

AIの開発に欠かせない力とは何でしょうか。それは言わずもがな「創造力」です。だから、いま言われている3つの資質・能力は、AIを開発するような創造性を発揮するための土台となるようなものであることが望ましいと言えます。

今後ますますAIとの関わりが多くなり、さらなる創造力が求められる時代において、学校教育はどうあるべきか。このような視座も、研究の方向性を探る際には大切にしたいと考えました。

### (1)-3 人としてよりよく生きること

---

法務省が出している「犯罪白書」(令和元年版)によれば、我が国の犯罪件数は平成14年をピークに減少し続け、今が第二次世界大戦後もっとも犯罪が少ない世の中になっていることがわかります。ところが、その中において横ばい、または微増傾向にあるのが詐欺犯罪で、認知されているだけで年間1万6千件以上に及んでいます(平成30年)。

詐欺犯罪に限らず、犯罪に手を染めてしまっている人の中には、いわゆる高学歴者もいるようです。過去に起きた凶悪な事件でも、一流大学を卒業した人が加担していたこともありました。

「知識」や「思考力」レベルにおいて、高いスコアを獲得できていたとしても、それを間違った方向に行使してはならないのは当然のことです。せっかく身につけた資質・能力を間違った方向に発揮してしまっただけでは本末転倒です。小学校教育で育まれた資質・能力を生涯にわたってよりよい方向に発揮されることが望まれます。

平和な世の中をつくっていくことは、日本のみならず、世界的で絶対的な課題です。単に「知識」を人より多く獲得できるような尺度だけで教育を語ってはいけぬのは明らかです。

人としてよりよく生きるとは、3つの資質・能力で言えば、「人間性等」の涵養に当たると思われます。私たちは教育活動を通して、人として生きること、真つ当に、そしてよりよく生きようとする子どもを育てなくてはなりません。見せかけの資質・能力ではない、本物の資質・能力を見据えなければならないのです。

研究の方向性を探るとき、子どもたちが、よりよく生きていくために、各教科等の授業改革をどのように進めるか。このような視座も忘れてはなりません。

### (2) 『きめる』学び』研究の知見から

---

令和元年までの4年間取り組んできた『きめる』学び』研究では、「知的にたくましい子ども」の育成を目的にして、理論的・実践的研究に取り組みました。その中で得た知見は以下の通りです。

- ①子どもが何かを「きめる」とき、「感覚的」にきめるときと「論理的」にきめるときがある。

- ②「感覚的」にきめることと「論理的」にきめることを往還させることで、知的たくましさがよりよく育つ。
- ③知的たくましさをよりよく育てるために、「価値ある遠回り」も有効に働く。
- ④「きめる」学びには、学ぶ様相として4つの要素（①自分の経験やそれまで身につけてきた知識・技能を生かして「きめる」、②自分事として「きめる」、③自分のこだわりをもって「きめる」、④自分が「きめた」学びを実感する）が認められた。

以上、「子ども自身が『きめる』こと」を授業に位置づけることで、知的にたくましい子どもの育成につながる事が明らかになりました。

その一方で、課題も見出されました。

例えば、道徳の授業において、子どもが何らかの価値について考え、自らの立場を「きめる」場面があります。その際、一般的に考えてよりよい行いや考えが明らかなきとき、自らに問いかけることなく、建て前としてよりよい立場に「きめる」ことはないのでしょうか。頭ではよりよい行いや考えをすべきということはきめることができますが、実生活においてはそのことがまったく意識されていないとしたら、「きめる」学びを指向した授業は、子どもの育ちを伴わない空虚なものになってしまいます。

長い人生において、さまざまな局面で自分が「きめる」ことは重要なことです。その際、知的な判断を伴うこともまた重要です。しかし、いくら知的にたくましく「きめる」ことができても、それが実際の行いとずれたものであってはいけませんし、方向性が間違ったものであってはいけません。

「知的にたくましい」「きめる」にはよりよい方向性が必要なのです。このことは、先述した高学歴者による犯罪の例とも関連づけられる考え方です。

新しい研究の方向性を考えるとき、「『きめる』学び」研究の成果や課題に立脚することは必然となりました。

### (3) 「日本の初等教育 本当の問題点は何か」研究を継承する

平成26年から3年間進められた本校研究では、全国の教師がそのとき真にもっていた問題意識を出発点にして、それらの問題解決を目指す理論的・実践的研究を進めました。

いつの時代も、現場にいる私たち教師が問題意識をもって教育を語ることは大切なことです。本校の新たな研究の方向性を探るとき、いまの我が国の小学校教育における問題点を洗い出すことも必要な作業であり、平成26年からの研究を継承していきたいと考えました。

では、学習指導要領が改まったいま、我が国の初等教育が抱える問題点はどこにあるのでしょうか。学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現を謳っています。このうち「深い学び」について考えてみましょう。「深い学び」の実現に際しては、留意することとして国が何点か列挙しています。そこに挙げられていないのが、「時間」のことです。

単純に考えて、何かを深く学ぶために必要なものの一つとして挙げられるのは「時間」です。例えば、音楽の授業において、子どもの思いや意図を生かして表現を高めよう、追究しようとするとき、相応の時間が必要であることは当然のことです。

しかし、いま教室の時間割は過密な状態にあります。

十分に保障された時間のなかで「主体的・対話的で深い学び」の実現に向かうことは、いま喫緊の課題となっていると思われます。

私たちは、カリキュラムが学校の時間枠からあふれ出ているいまの状況「カリキュラム・オーバーロード」が、初等教育が抱える問題であると考えました。

本研究においては、各教科等におけるカリキュラムを今一度見直し、資質・能力時代に応じた「新しいカリキュラムモデル」の創出を新しい研究内容に位置づけたいと考えました。

(このカリキュラムモデル創出研究については、令和2年度から4年間、文部科学省から「研究開発学校」指定を受けています)

## 2. 『美意識』を育てる」研究の概略

### (1) 研究テーマ

ここまで本校研究の方向性を探るために、いまの社会状況、本校先行研究の成果や課題について述べてきましたが、それらを参考にして研究テーマが生まれたのです。

### 「美意識」を育てる

### (2) なぜ「美意識」なのか？

人生107年時代を幸せに生き抜くために必要な資質・能力を育てることが大切だと言いました。価値観が多様化している昨今ですが、今後はますます多様化が進むと予測されます。

そのような時代にあって、個々人は何をもとに自らの価値観をつくりあげていくのでしょうか。もちろん、価値観を形成していくには、相応の知識も必要だし、その知識をもとにして思考、判断することが大切です。そのとき、学校教育が果たす役割は非常に大きなものです。だから、いま学校で3つの資質・能力を育てる必要性が叫ばれているのです。学校には共に学ぶ仲間がいる。先生がいる。いろいろな人との交わりを通して3つの資質・能力を育てるところに学校のよさや強みがあります。

しかし、3つの資質・能力を育てるといふとき、単に多くの知識を覚えられればよいわけではないし、先の道徳の授業の例で示したとおり、空虚な思考力を育てるのも間違いです。それらは、言わば「見せかけの資質・能力」です。

そうではなく、資質・能力を本質的な方向に働かせようとする根本的な「何か」が

あると仮定し、その「何か」を、私たちは「美意識」と呼び、育てることを志向したのです。

「美意識」という言葉は、「日本の美意識」とか「あの人の美意識は高い」などと使われます。つまり「美意識」とは、あるものや人の中にある固有のものであり、人それぞれ違ったものでしょう。それぞれ多様です。その個の「美意識」に従って、知識を生かし、思考・判断し、その人らしい生き方を決めていく。これが、多様な価値観が存在する新しい時代の生き方なのではないでしょうか。「美意識」がその人の人生を方向づけていくという考え方です。

このように、本研究では「美意識」という言葉を研究の柱として据えたのです。

### (3) 本研究における「美意識」とは何か？

本研究における「美意識」をどのように定義づけるかについては、紆余曲折ありました。幾多の研究授業、その後の協議会、研究企画部会で修正を重ね続け、4年間あった研究期間の2年目終了時に、ようやく下のように落ち着きました。

「美意識」とは、その子の「みえ方」や「こだわり」をもとに、本質を捉え深めようとする心の働きである。それは「共に幸せに生きるために発揮される資質・能力」の源である。

### (4) 本研究の目的

本研究の目的は以下のとおりです。

初等教育において、子どもに育むべき「美意識」とはどのようなものか、そしてどのように育むことができるかを探るとともに、「美意識」をよりよく育むためのカリキュラムモデル創出を試みることを本研究の目的とする。

本研究の目的に、「子どもに育むべき『美意識』とはどのようなものか」とあります。ここで言う「美意識」とは、各教科や領域がもつ特性に鑑みて授業の中で育まれる「美意識」のことです。その「美意識」とはどのようなものなのかを実践的に探っていくことが一つの大きな目的なのです。また授業を通してその「美意識」がどのように育まれていくのか、授業を構築する際に「美意識」という概念をもち込むことで、授業がどのように改善されるのかが、研究の主眼となります。

また、「『美意識』をよりよく育むためのカリキュラム創出」とは、「美意識」を育むために各教科や領域における学習内容を吟味し、配列を試みることを指しています。

資質・能力ベースで書き換えられた新学習指導要領ですが、学習内容については従前の学習指導要領と大きな変化がありません。本研究では、「美意識」が支えとなる資質・能力をよりよく育むために、真に必要な学習内容は何かを抽出し、それらを構